

フーリガンに関する報道がサッカーに与えた影響

The impact on football made by the report of hooligan

1K07B179-4

指導教員 主査 リー・トンプソン先生

福羽 一樹

副査 寒川恒夫先生

【序論】

2002年に日韓共催で行われたFIFAワールドカップでは、イングランドのスター選手であるデービット・ベッカム選手や、出場が危ぶまれながら開催間際に来日することができたカメルーン代表などの話題が世間を賑わせていたが、メディアが取り分け大々的に報じたのは、フーリガンに関するものであった。それらの報道を受け、国内では様々なフーリガン対策がなされたものの、実際騒ぎを起こす外国人サポーターはおらず、フーリガンに関する一連の報道が過剰であった可能性がある。いくつかのフーリガンに関する報道を分析し、それらがサッカーにどのような影響を与えてきたかを本稿では考察していく。

【第一章 フーリガンの成り立ち】

第一章では、フーリガンと呼ばれる暴力的なサポーターが生まれた経緯について述べている。フーリガンは1960年代以降、イギリスやドイツを中心に波及していった。1980年代のイギリスでは経済不況に伴い、多くの失業者を生み、労働者階級の国民に多大な負担を与えることとなった。生活の中で、フラストレーションが溜まった彼らにとって、サッカー観戦は最も身近な娯楽の一つであった。やがてサポーター同士の、局地的、近親的一体感が互いに「仲間」意識を生み、集団での組織化された暴力へと発展していく。

【第二章 フーリガン事件とメディア】

第二章では、サッカー史上最悪のフーリガン事件とされている、1985年にベルギーのヘイゼルスタジアムで起こった事件の概要と、メディアの動向を考察する。事件はチャンピオンズリーグの決勝である、リヴァプール対ユヴェントスの試合で起こった。サポーター同士の小競り合いから大規模な暴動に発展し、死者39名、負傷者400名以上を出す大惨事となった。この事件に関して、様々な報道がなされた影響を受け、立ち見席の撤廃やチケットのIDカード制などが導入され、サッカーを取り巻く制度が徐々に変更されていく。

【第三章 日韓ワールドカップにおけるフーリガン報道】

ここでは、日韓ワールドカップにおいて、フーリガンに対す

る過剰な報道がなされた経緯を述べ、メディアがそのような報道を行った意図を考察していく。フーリガンはワールドカップの「見どころ」でもあり、ある種期待されたコンテンツであった。サッカーそのものとは関係のない素材で話題を提供することで、大衆の関心を引き付けることができる。また、フーリガンとは逆に、日本に友好的な外国人サポーターを取り上げることで、日本文化への敬意の表明と、敵意のない無邪気な行動によって日本社会に受容されていく様子描きだしている。

【第四章 フーリガン報道と制度の変化】

第四章では、フーリガンに関する報道が、サッカーの制度やサポーターの観戦態度にどのような影響を与えたのかを分析する。アルコールの持ち込みなどを制限することによって、暴力行為の減少に至った一方で、IDカードの導入により観客動員数が伸び悩んでいることも現状である。また、チケットの値上げや、自宅でテレビ観戦するファンも増加したことも観客動員数に影響を与えている。スタジアムでの様々な規制を設けることが、必ずしも有益な結果を生むわけではない。

【終章 まとめ】

フーリガンに関する報道は、全てが事実ではなく、多少脚色されたものも多く見受けられる。メディアの影響力は絶大であり、様々な制度の改訂にも影響を及ぼしてきた。過剰であったり、脚色された報道は、社会に誤ったイメージを付与することに繋がりがねない。情報の受け手側は、それが事実に基づいた報道であるかどうか吟味する必要がある。